

〔古事記傳四十三〕袁遲那美許曾は拙劣アヂナカみこそなり、續紀卅詔に先乃人波謀乎サキヒトハハカリトトガナシ。都與久謀天必得天牟止念天タムトモヒテ。中拙愚なる意、弱き意などを兼たる言なり。

〔古京遺文〕佛足石歌碑

乎。遲奈伎夜、和禮爾於止禮留、比止乎於保美、和多佐牟多米止、宇都志麻都禮利、都加閉麻都禮利。
〔倭訓栞前編五〕をちなし。日本紀に懦弱をよみ、又怯をよめり、古事記の歌、佛足石の歌などにも見えた。無男道の義なるべし、竹取物語にもみゆ。

〔倭訓栞前編四五〕おくす。物語に見ゆ、憶字の義也、念也、思也と注せり、俗に畏疾を憶病といへり、新猿樂記には臆病と書り、むねのやまひの義、俗におく病神などもいへり、源氏におくたかきともいへり、疑らくは奥より轉せし詞なるべし、憶も亦意に通すれば、臆病もよし。

〔下學集下藝〕臆病

〔書言字考節用集八辭〕臆病

〔日本書紀四綏靖〕神淳名川耳天皇、中略至四十八歳、神日本磐余彥天皇、○神崩、中其庶兄手研耳命、○手研耳命、中略、苞藏禍心、圖害二弟、○中神淳名川耳尊、欲以射殺手研耳命、會有手研耳命於片丘大窖中、獨臥于大牀、時神據一本補淳名川耳尊謂神八井耳命曰、○中吾當先開窖戶、爾其射之、因相隨進入、神淳名川耳尊突開其戶、神八井耳命則手脚戰慄不能放矢、時神淳名川耳尊掣取其兄所持弓矢而射手研耳命、一發中胸、再發中背遂殺之、○下

〔日本書紀十四〕五年二月、天皇狡獪于葛城山、○中俄嗔猪從草中暴出、○中舍人性懦弱、緣樹失色、五情無主、十八年八月戊申、遣物部菟代宿禰、物部目連、以伐伊勢朝日郎、○中爰有讚岐田虫別進而奏曰、菟代宿禰タチナシ也、二日一夜之間、不能擒執朝日郎、而物部目連率筑紫聞物部大斧、手獲斬朝日郎矣、天皇聞之怒、輒奪菟代宿禰所有猪名部賜物部目連、